ける、簡を付て大花と書たりけり、此事は孝道がたうは、みな鼻の大きなるによりて、院の仰にも、鼻がたうとぞ有ける、これによりて大花と簡を付たりけり、比興の沙汰にてこそ侍ける、

〔徒然草下〕花はさかりに、月はくまなきをのみ見るものかは、〇下略

藥

〔倭名類聚抄二十木具〕藥　東宮切韻云、藥而髓反、和名之倍、花心也、

〔撮壤集中木〕藥シベ

〔書言字考節用集六生植〕藥ハナノシベ廣匂、花外曰萼、内曰藥、

〔倭訓栞前編十一志〕しべ　心瓣の音にや、藥心をわらしべといひ、花瓣を花のしべといへり、後拾遺集に花のしべ、紅葉の下葉と見えたり、倭名抄に藥を訓ぜり、

〔海西漫錄初編三〕陽藥陰藥

梅花に陽藥陰藥有り、陰は中に在り、陽は周廻に在り、陰陽氣を通はすによりて香氣を發し、此營あるが故に實を結ぶといへり、

葩

〔倭名類聚抄二十木具〕葩　東宮切韻云、葩音巴、和名波奈比良、草木花片也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕說文、葩、華也、說文又有ㇾ皅字、云、艸華白也、

〔伊呂波字類抄波殖物附殖物具〕葩ハナヒラ、花新也、亦作ㇾ皅、草木、

〔書言字考節用集六生植〕葩ハナビラ順和名、草木花片也、

〔剪花翁傳前編一凡例〕花形分解之辨〇中略

一に曰、葩は花枚(はなびら)の義、ちれば幾枚(いくひら)となる也、又花開(はなひら)くの義、又花ひらけば平になる義あり、

萼

〔倭名類聚抄二十木具〕萼ハナフサ　東宮切韻云、萼、五各反、和名波奈布佐、一云花房、承ㇾ花跗也、

〔箋注倭名類聚抄十木具〕按、韻會云、萼俗作ㇾ蕚、

〔伊呂波字類抄波殖物附殖物具〕萼ハナフサ　花房　蘂　柎　蔕　蕤已上ハナ、ハナフサ、